



山本達男 さん
(東本町一丁目・56歳)

マナーを覚えることも 大切です

未来に夢を与えたい

2002年11月ごろに中国・広東省で発生したSARS（重症急性呼吸器症候群）がアジアを中心に流行し、世界各国に広がりました。その影響のせいか、国内旅行の需要が増え、海外への旅行者は半減状態になり、海外旅行者が国内に振り変わっている格好になっています。

そこで今回は、海外になかなか行けない人にも生活の広がりを与えようと輸入生活雑貨の店「マミーコンチネンタル」を営んでいる山本達男さんを訪ねました。

「10年間ハンバーガー店をやっていましたが、16年前に本格的な輸入雑貨の店としてオープンしました。オープンしたころは、ヨーロッパや東南アジアなどへ何度も出かけ商品の勉強をしましたね。現在、初心者から上級者までの商品、約1000点をそろえています。どんな人でも入れて、どんな人でも買えることが店のコンセプトです。」

外国の高価な商品が並んでいると、見てみたい

ぶんがくかん発
Vol.71

辰野九紫 - ユーモア小説の大御所 -

昭和初年から戦後にかけて、ユーモア作家として活躍した一人の古河ゆかりの文学者がいました。当時の暗い世相を、シニカルな眼で捉え、洒落のめしたその人の名は辰野九紫（本名・小堀龍二、1892～1962）。

辰野は明治25年、鳥取生まれ。東京帝国大学法学部卒業後、十数年間、サラリーマン生活をおくります。昭和4年、37歳の時、雑誌『新青年』の懸賞小説に応募した「青バスの女」というユーモア小説が当選、以後、作家生活に入りました。『新青年』『サンデー毎日』『スタイル』等の雑誌に諧謔小説を発表する一方、主として大衆文学に関する漫文を発表したり、映画『丸の内五人女』（昭和6年・新興キネマ）の原作を手がけ、また、『日本現代文章講座』（厚生閣 昭和9年）の第五巻・技術編には「ユーモア小説の構成と技術」が収録されるなど、ユーモア小説の第一人者として活躍しました。ちなみに彼のナンセンス小説はかの横光利一をして「インテリ向き」だと言わしめています。また、創作活動のかたわら、昭和11年には佐々木邦らと

もにユーモア作家倶楽部を結成しました。

ところで、辰野九紫自身は、鳥取に生まれ、生涯の大半を東京で過ごしましたが、警察官だった父・六之介は古河の小堀家に婿入りし、鳥取勤務などを経て、退職後、古河に戻りました。そして、辰野もしばしば古河に帰ってきていたようです。当時の『古河郷友会雑誌』（60号・昭和6年）を



昭和12年弟史朗応召時 前列右端辰野九紫
(小堀文一著『一族』より転載)

開いてみると、古河（在郷）正会員名簿に「西片町・法学士・小堀龍二」の名が見えます。また、同じく67号には「小堀龍二氏 辰野九紫のペンネームを以て、現にユーモア小説界の大御所たる氏は、令弟の出征に依り、令弟経営の会社に於て社長代理をされ、文筆との二筋道にて頗る多忙を極められつゝあり」との記事がみられ、辰野が古河で生活していたこ

とがうかがえます。

東京に生活基盤があったとはいえ、辰野にとって古河はふるさとであると同時に、彼自身まさに「古河人」であったと言えます。

(企画展「古河の文芸」は、9/25まで開催)